

二人の若いしんしが、すつかりイギリスの兵隊の形をして、ぴかぴかする鉄ぼうをかついで、白くまのような犬を二ひき連れて、

一 英語のゲーム(game)は本来、狩猟の意味である。

特に中世ヨーロッパでは、狩猟は王侯、そして彼らから許可された貴族の特権\*<sup>1</sup>であった。家畜を食べ慣れた彼らにとって、狩猟により得られる野生の鳥獣は貴重であり、珍重されたが、それ以上に、戦士階級である彼らにとって、獲物を追うことは、楽しみ、軍事演習、武勇の誇示といった意味があった。

だいぶ山奥の、木の葉のかさかさしたところを、こんなことを言いながら、歩いておりました。

「ぜんたい、ここの山はけしからんね。鳥もけものも一ぴきもいやがらん。」

しんし「上流社会の男子。品格があつて礼儀にあつてい人がらがりつばで、れいぎ正しい男の人

すつかりイギリスの兵隊のかたちをして

熊の毛皮の帽子、真っ赤な上着、革靴。頭の先から足先まで兵隊になりきっている

世界の最先端をいくイギリスの最高の服装

ぴかぴかする鉄砲

ぴかぴか「光沢があつて光っているようす。表面が光っているところから、新しい様子を比喩的に言う

する鉄砲(彼のカメラはぴかぴかの新品だ)

真新しい、まだ使ったことのない新品の鉄砲

白熊のような犬

凶体が熊のように大きな犬。強そうに見えるが猟には適さない。

「しんし」然たるべく、最大限の見栄をはって、まったく場違いの装いになってしまっていることに気づかない滑稽さ。この一文で、すでに「しんし」への嘲笑が描かれている

冒頭の場面を読んで、どんな二人が見えてきましたか？

しんし」と書いてあるけど、しんしらしく見えましたが？

問：「しんし」と書いていますが、しんしらしいところはどこですか？

問：二人の服装を頭に浮かべてみましょう。

かつこいいですか？それとも変ですか？

だいぶ山奥の、木の葉のかさかさしたところ  
・異界の入り口を暗示する表現

ここの山はけしからんね 一ぴきもいやがらん  
けしからん「よくない。とんでもない。道理や礼儀にはずれていてよくない。無礼だ。不都合だ。」

やがる「相手や他人の動作をぞんざいに言ったり、ののしりいやしめたりする意に用いる。ある動作をしていることをばかにしたり、ののしったりするときに使うらっぽうなことば

自分たちの住んでいる都会に比べて、このあたりのど田舎は全くどうしようもなくひどい、と見下げた意識が言葉の裏側に見える。

なんでもかまわないから、早くタンタアーンと、やってみたいもんだなあ。」

「しかの黄色な横つ腹なんぞに、二三発お見ま  
いもうしたら、ずいぶん痛快だろうねえ。くるく  
る回って、それからどたとたおれるだろうね  
え。」

それはだいぶの山奥でした。案内してきた専  
門の鉄ぼう打ちも、ちよつとまごついて、どこか  
へ行ってしまったくらいの山奥でした。

それに、あんまり山がものすごいので、その  
白くまのような犬が、二ひきいっしょにめまいを  
起こして、しばらくうなづいて、それからあわをは  
いて死んでしまいました。

「じつにぼくは、二千四百円の損害だ」と一人  
のしんしが、その犬のまぶたを、ちよつとかえし  
てみて言いました。

「ぼくは二千八百円の損害だ。」と、もひとりが、  
くやしそうに、頭を曲げて言いました。

はじめのしんしは、すこし顔色を悪くして、  
じつと、もひとりのしんしの、顔つきを見ながら  
言いました。

「ぼくはもうもどろろとおもつ。」

「さあ、ぼくもちようど寒くはなつたしはらは  
すいてきたし、もどろろと思う。」

「せいじゃ、これで切りあげよう。なあにもど  
りに、昨日の宿屋で、山鳥を十円も買って帰れば  
いい。」

「うさぎもでていたねえ。そうすれば結局おん  
なじこつた。では帰ろうじやないか」

ところがどうも困ったことは、どっちへ行け  
ばもどれるのか、いっこうに見当がつかなくなっ  
ていました。

風がどうと吹いてきて、草はざわざわ、木の  
葉はかさかさ、木はごんごんと鳴りました。

なんでも構わないから、早くタンタアーンと、やってみたい  
獲物を捕りたいのではない。ただ鉄砲を撃つてみたいのだ。

鹿の黄いろな横つ腹なんぞ  
痛快ニすかつとしてとても気持ちのよいようす。たいへんゆか  
いなようす  
・もてあそぶ対象としての「鹿」。射撃ゲームを楽しむ感覚。

それはだいぶの山奥でした

あたりは、すでに異界

あたりの不気味な景色、犬の変死を目の当たりにしているのに、  
怖さより、金のことを考える二人。

「しんし」の外面の内側にある浅はかで単純な本性が見える。  
大正15年の1円は現在の約574倍の価値があるということ  
です。

2800 円=1607200 円

自分たちのまわりの不気味さにやっと気づいた。

昨日の宿屋で、山鳥を拾円も買って帰ればいい。  
五千七百四十円

・帰ってみるに「撃ってきた獲物」として見せびらかすため。

風がどうと吹ふいてきて、草はざわざわ、木の葉はかさかさ、  
木はごんごんと鳴りました。

異界の幕開け

「どうもはらがすいた。さつきから横つばらが痛くてたまらないんだ。」

「ぼくもそうだ。もうあんまり歩きたくないな。」

「歩きたくないよ。ああこまったなあ、何か食べたいなあ。」

「食べたいもんだなあ」

二人のしんしは、ざわざわ鳴るすすきの中で、こんなことを言いました。

その時ふと後ろを見ますと、りつばなな一軒の西洋造りのうちがありました。

そしてげんかんには

RESTAURANT

西洋料理店

WILDCAT HOUSE

山猫軒

という札がでていました。

「君、ちょうどいい。ここはこれでなかなか開けてるんだ。入ろうじゃないか」

「おや、こんなところにおかしいね。しかしとにかく何か食事ができるんだろう」

「もちろんできるさ。看板にそう書いてあるじゃないか」

「入ろうじゃないか。ぼくはもう何か食べたくてたおれそうなんだ。」

二人はげんかんに立ちました。げんかんは白瀬戸のれんがで組んで、実にりつばなもんです。

そしてガラスの開き戸がたつて、そこに金文字でこう書いてありました。

「どなたもどうかお入りください。決してごえんりよはありません」

二人はそこで、ひどく喜んで言いました。

「いつはだろうだ、やつぱり世の中はうまくできてるねえ、きょう一日なんぎしたけれど、こんどはこないいいこともある。このうちは料理店だけれどもただでこちそうするんだぜ。」

「どうもそうらしい。決してごえんりよはありませんというのはその意味だ。」

立派な一軒の西洋造りの家

西洋かぶれのえせしんしが引きつけられるような建物。

「英語」で書かれていることが、更に心を惹きつける。

開けている「世の中がすすんで便利になる

「西洋造り」「英語の看板」に単純に惹きつけられるしんしA

あり得ないシチュエーションなのに、「食欲」が優先してしま  
うしんしB

すぐ知識をひけらかしたがるしんしA

はらが減った↓食べたい という単純思考のしんしB

豪華で高級感あふれる玄関。金文字。わくわくするような建前。

「決してご遠慮はありません。」「ただ とは読めないはずなのに、「ただでこちそうしてくれ」

と受け取ってしまう。本性がけちんぼな二人なのでそう解釈してしまう。

二人は戸をおして、中へ入りました。そこはすぐろうかになっていました。そのガラス戸のうら側には、**金文字**でこうなっていました。

「ことに太ったお方や若いお方は、大かんげいいたします」

二人は大かんげいというので、もう大喜びです。「君、ぼくらは大かんげいに当たっているのだ。」  
「ぼくらは両方かねてるから」

「**ずんずん**ろうかを進んで行きますと、

こんどは**水**いろのペンキぬりの戸がありました。

「**どうも**変なうちだ。 どうしてこんなにたくさん戸があるのだろう。」

「これはロシア式だ。 寒いとこや山の中はみんなこうさ。」

そして二人はその戸をあけようとしてみると、上に黄いろな字でこう書いてありました。

「当軒は注文の多い料理店ですからどうかそこはご承知ください」

「なかなかはやってるんだ。 こんな山の中で。」

「それあそくだ。 見たまえ、東京の大きな料理屋だって大通りにはすくないだろう」

二人は言いながら、その戸をあけました。するとそのうら側に、

「注文は**ずいぶん**多いでしょうがどうかいちいちこらえて下さい。」

「これはぜんたいどういうんだ。」ひとりのしんしは顔をしかめました。

高級感をアピールする「金文字」

かんげい⇨よろこび迎えること。 好意をもって迎えること  
ことに⇨多くのものなかでも特に。 とりわけ

山猫側⇨年寄りのやせっぽちを喰うより若くてたつぷり肉のついている人間の方がうまい。

もう大よろこびです。

「どなたも」↓「ことに」 自分たちは特別待遇の条件にかなっている。

「**ずんずん**」 周囲の状況にかかわりなく、物事の進行、変化のはかどるようす。

「**ぐんぐん**」は力強く勢いよく進ようす。「ずんずん」は抜きんでるように目立つ進み方

「大歓迎されている」と思っているから、何の不安もなく、胸をはって勢いよく歩いて行く。

単純思考のしんしBは素朴に疑問を持つ

インテリぶって知識をひけらかすしんしA。

状況を「先進的な知識」で解釈してみせる。  
しんしBは単純に納得してしまう。

山猫側⇨これからの指示を疑いなく受け入れてくれるように、というはかりごと

「注文が多い」⇨お客が多い と単純に受け止めるしんしB

一つひとつ解釈してみせることで自分の知識の豊かさを誇示したがるしんしA

山猫側⇨念には念を入れて

しかめる⇨不機嫌・苦痛などのために)額・顔の皮をちぢめて皺(しわ)をよせる。

「注文は**ずいぶん**多いでしょうが」とは誰が読んでも意味不明。単細胞のしんしBはいらつく。「こんなところにおかしいね」とい

「うん、これはきつと注文があまり多くてしたくが手間取るけれどもごめんくださいとこういうことだ。」

「そうだろう。早くどこか部屋の中に入りたいもんだな。」

「そしてテーブルにすわりたいもんだな。」

ところがどうもうるさいことは、また戸が一つありました。そしてそのわきに鏡がかかって、その下には長いえの付いたブラシが置いてあったのです。

戸には赤い字で、

「お客さまがた、ここにかみをきちんとして、それからはきものどろを落としてください。」

と書いてありました。

「これはどうももつともだ。僕もさつきげんかんで、山の中だとおもって見くびつたんだよ」

「作法のきびしい家だ。きつとよほどえらい人たちが、たびたび来るんだ。」

そこで二人は、きれいにかみをけずって、くつのだろを落としました。

そしたら、どうです。ブラシを板の上に置くやいなや、そいつがぼうつかすんでなくなつて、風がどうつと部屋の中に入ってきました。

二人はびっくりして、たがいによりそって、戸をがたんと開けて、次の部屋へ入って行きました。早く何か温かいものでも食べて、元気をつけておかないと、もうとほうもないことになってしまふと、二人とも思ったのでした。

戸の内側に、また変なことが書いてありました。

「鉄ぼうとたまをここへ置いてください。」

見るとすぐ横に黒い台がありました。

「なるほど、鉄ぼうを持ってものを食うという法はない。」

「いや、よほどえらい人が始終来ているんだ。」

二人は鉄ぼうを外し、帯皮を解いて、それを台の上に置きました。

疑念がこの正直な反応の裏にある。全く疑いを持っていないしんしAは情報をすべてプラスの方向で解釈していく。

うるさい≠わずらわしい。じやまになる

赤信号と同じく、注意を引くために

山猫側≠汚れを落として食べやすい形にさせる。

単細胞の紳士Bは、素直に「もつともだ」と反応する。

作法≠動作や行い、ことばづかいのきまつたしかた。エチケット。礼儀

ただのレストランではない。身支度を調べて入らないといけな

「偉い人」との出会いを念頭に、ていねいに

二人はびっくりして あり得ない出来事に怖くなってしまふ

もう途方もないことになってしまふ 「異界」を直感してしまふ。

「変だ」と最初は思う。

山猫側≠策略に気づいて発砲されたりしないように。

一瞬感じた恐ろしさは、この常識的な指示に納得し、むしろ、それほど超高級なレストランなんだと納得することで、消えてしまふ。

また黒い戸がありました。

「どうかぼうしと外とうとくつをおとりください。」

「どうだ、取るか。」

「しかたない、取るう。確かによつぽどえらい人なんだ。おくに來ているのは」

二人はぼうしとオーバーコートをくぎにかけ、くつをぬいで、ぺたぺた歩いて戸の中にはいりました。

戸のうら側には、

「ネクタイピン、カフスポタン、眼鏡、さいふ、その他金物類、

「ことごとがったものは、みんなここに置いてください。」

と書いてありました。戸のすぐ横には黒ぬりのりつぽな金庫も、ちゃんと口を開けて置いてありました。かぎまでそえてあったのです。

「ははあ、何かの料理に電気をつかうと見えるね。金気のものはおぶない。ことごとがったものはおぶないとこういうんだらう。」

「そうだらう。して見るとかんじようは帰りにここで払うのだらうか。」

「どうもそうらしい。」

「そうだ。きつと。」

二人は眼鏡を外したり、カフスポタンを取ったり、みんな金庫のなかに入れて、パチンとじょうをかけました。

すこし行きますとまた戸があつて、その前にガラスのつぽが一つありました。戸にはこう書いてありました。

「つぽの中のクリームを顔や手足にすつかり塗ってください。」

見ると確かにつぽの中のものは牛乳のクリームでした。

「クリームをぬれというのはどういうんだ。」

「これはね、外がひじょうに寒いだらう。へやのなかがあんまりあたたかいとひびがきれるから、その予防なんだ。どうもおくには、よほどえらい人が來ている。こんなところで、案外ぼくらは、貴族とちかづきになるかも知れないよ。」

山猫側⇨食べるときにじやまなものを外させる

ぼうしをやくつを取らないとまわりの客に失礼になる。それほど気をつかねばならない偉い人たちが集まっているんだ、と解釈する。

山猫側⇨食べられないもの、特に危険な物を取らせる

黒ぬりのりつぽな金庫

成金根性の二人には「このレストランはやつぱりすごい。」と見える

また知識をひけらかすしんしA

「財布を置く」理由を単純に解釈しているしんしB。

山猫側⇨クリームを塗らせておいしく食べたい

単細胞のしんしBの素朴な疑問

知ったかぶりしたがるしんしA。

貴族⇨むかし、とくべつのけんりをもっていた家がらや身分の高い人々  
ちかづく⇨なかよくつきあうようにする。親しくつきあうよう

二人はつぼのクリームを、顔にぬって手にぬってそれからくつ下をぬいで足にぬりました。それでもまだ残っていましたから、それは二人ともめいめいこっそり顔へぬるふりをしながら食べました。

それから大急ぎで戸をあけますと、そのうら側には、

「クリームをよくぬりましたか、耳にもよくぬりましたか、」

と書いてあって、小さなクリームのつぼがここにも置いてありました。

「そうそう、ぼくは耳にはぬらなかつた。あぶなく耳にひびを切らすとこだった。この主人はじつに用意周とうだね。」

「ああ、細かいとこまでよく気がつくよ。ところでぼくは早く何か食べたいんだが、どうもこうどこまでもろうかじや仕方ないね。」

するとすぐその前に次の戸がありました。

「料理はもうすぐできます。」

十五分とお待ちせはいたしません。

すぐ食べられます。

早くあなたの頭にびんの中のこう水をよくふりかけてください。」

そして戸の前には**金ピカのこう水のびん**が置いてありました。

二人はそのこう水を、頭へばちやばちやふりかけました。

ところがそのこう水は、どうもすのようなおいがするのです。

「このこう水はへんにすくさい。どうしたんだろう。」

「まちがえたんだ。下女がかぜでもひいてまちがえて入れたんだ。」

二人は戸を開けて中に入りました。

戸のうら側には、**大きな字で**こう書いてありました。

「いろいろ注文が多くてうるさかつたでしょう。お気の毒でした。」

にする。  
偉い人と仲良しになれたらうれしい。

二人ともめいめいこっそり顔へ塗るふりをしながら食べました。  
二人の「しんし」のさもしい下品な本性。

大急ぎで

腹が空いて早く食べたい

山猫側||きつちり塗つてあるほうがうまい。

用意周到||したくがすつかりととのつていること 用意が十分にととのつて手抜かりのないこと。

山猫側||とつての用意周到↓完璧な料理に仕立てたい

するとすぐその前に次の戸がありました。

山猫側||「これはまずい。急がないと気づかれてしまう。」

とあわてている

すぐ食べられます。

早く

しんしへの説得の言葉だが、「すぐ食べたい」という山猫側の本音が思わず出てしまっている。

単細胞のしんしB

信じ込んでいるからプラスに解釈してしまうしんしA

大きな字で

山猫側||後一つで準備万端整うという気合いがこもる。

もうこれだけです。どうか体中に、つぼの中の塩をたくさんよくもみ込んでください。」

なるほど「りつばな青い瀬戸の塩つぼは置いてありましたが、今後という今度は二人ともぎよつとしておたがいにクリームをたくさんぬった顔を見合わせました。

ぎよつと不意に、恐ろしいこと、思いがけないことに直面して驚きで心が一瞬衝撃を受ける様子。  
・不意に後ろからピストルを突きつけられて、ぎよつとする。  
・夜道の前方に黒い影が立っているのに気づいてぎよつとして立ちすくんだ

今度という今度は

今までにも変だと思ふことは何度もあった

○「おや、こんなところにおかしいね。(山奥にレストラン)

・どうも変なうちだ。(戸が多すぎる)

・これはぜんたいどういうんだ。(説明がくどすぎる)

○二人はびっくりして (ぼうつとかすんで 風がどうつと)

もうとほうもないことになってしまふと

・また変なこと (鉄砲とたまをここに)

・しかたない、取ろう。(ぼうしとがいとくとくつをとれ)

・クリームをぬれというのはどういうんだ。

・このころ水はへんにすくさい。

今後という今度は (体中に塩を)

どうもおかしいぜ。

。

「どうもおかしいぜ。」

「ぼくもおかしいとおもう。」

「たくさん注文というのは、向うがこっちへ注文してるんだよ。」

「だからさ、西洋料理店というのは、ぼくの考えるところでは、西洋料理を、来た人にたべさせるのではなくて、来た人を西洋料理にして、食べさせてやるうちとこういうことなんだ。これは、その、つ、つ、つ、つまり、ぼ、ぼ、ぼくらが……。」

「あなたがたがた、ふるえだしてもうものが言えませんでした。」

「その、ぼ、ぼくらが、……うわあ。」あなたがたがたがたふるえだして、もうものが言えませんでした。

「にげ……。」あなたがたしながら一人のしんしはうしろの戸をおそうとしましたが、どうです、戸はもう一分も動きませんでした。

奥の方にはまだ一枚戸があつて、大きなかぎ穴が二つつき、銀いろのホークとナイフの形が切りだしてあつて、

「いや、わざわざ苦勞です。

大へん結構にできました。

さあさあおなかにおはいりください。」

「注文はずいぶん多いでしょうがどうかいちいちこらえて下さい。」

「きつと注文があまり多くてしたくが手間取るけれどもごめんだくださいとこういうことだ。」

たくさん注文というのは、向うがこっちへ注文してるんだよ



と書いてありました。おまけにかぎ穴からはきよろきよろ二つの青い目玉がこつちをのぞいています。

「うわあ。」がたがたがたがた。

「うわあ。」がたがたがたがた。

ふたりは泣きだしました。

すると戸の中では、こそそこそこんなことを言っています。

「だめだよ。もう気がついたよ。塩をもみこまないようだよ。」

「あたりまえさ。親分の書きようがまずいんだ。あすこへ、いろいろ注文が多くてうるさかったでしょう、お気の毒でしたなんて、まぬけたことを書いたもんだ。」

「どっちでもいいよ。どうせぼくらには、骨も分けてくれやしないんだ。」

「それはそうだ。けれどももしここへあいつらがいって来なかったら、それはぼくらの責任だぜ。」

「よぼうか、よぼう。おい、お客さん方、早くいらつしやい。いらつしやい。いらつしやい。お皿も洗ってありますし、菜っ葉ももうよく塩でもんでおきました。あとはあなたがたと、菜っ葉をうまくとりあわせて、まっ白なお皿にのせるだけです。はやくいらつしやい。」

「へい、いらつしやい、いらつしやい。それともサラドはおきらいですか。そんならこれから火をおこしてフライにしてあげましょうか。とにかく早くいらつしやい。」

二人はあんまり心をいためたために、顔がまるでくしゃくしゃの紙くずのようになり、おたがいにその顔を見合わせ、ぶるぶるふるえ、声もなく泣きました。

中ではふつふつと笑ってまたさけんています。

「いらつしやい、いらつしやい。そんなに泣いてはせつかくのクリームが流れるじゃありませんか。へい、ただいま。じきもってまいります。さあ、早くいらつしやい。」

「早くいらつしやい。親方がもうナフキンをかけて、ナイフをもって、舌なめずりして、お客さま方を待っています。」

二人は泣いて泣いて泣いて泣いて泣きました。

そのとき、後ろからいきなり、

「ワン、ワン、グワア。」という声が出て、あの白くまのような犬が二ひき、戸をつき破って部屋の中に飛びこんできました。かぎあなの目玉はたちまちなくなり、犬どもはウーとうなつてしばらく部屋の中をぐるぐる回っていました。また一声

「ワン。」と高くほえて、いきなり次の戸に飛び

恐ろしい山猫のイメージががらりと切り替わり、どこか愛嬌のあるとぼけた山猫の実像が見えてくる。

二人は泣いて泣いて泣いて泣いて泣きました。

これが紳士の実像。

徹底的に「しんし」を懲らしめてやるという賢治の怒り

異界の終了

つきました。戸はがたりとひらき、犬どもはすいこまれるように飛んでいきました。

その戸の向うの真つ暗やみの中で、「ニャアオ、クワア、ゴロゴロ。」という声がして、それからガサガサ鳴りました。

部屋はけむりのように消え、二人は寒さにぶるぶるふるえて、草の中に立っていました。

見ると、上着やくつやさいふやネクタイピンは、あっちの枝にぶらさがったり、こっちの根もとに散らばったりしています。

風がどうと吹ふいてきて、草はざわざわ、木の葉はかさかさ、木はごんごんと鳴りました。

犬がフーとうなってもどってきました。そして後ろからは、

「だんなあ、だんなあ、」とさけぶ者があります。

二人はにわかに元気がついて

「おおい、おおい、ここだぞ、早く来い。」とさけびました。

みのぼうしをかぶった専門の猟師が、草をザワザワ分けてやってきました。

そこで二人はやっと安心しました。

そして猟師のもってきただんごを食べ、とちゅうで十円だけ山鳥を買って東京に帰りました。

しかし、さつき「ぺん紙くずのようになった二人の顔だけは、東京に帰っても、お湯にはいつでも、もう元のとおりになおりませんでした。

みのぼうしをかぶった専門の猟師  
イギリスの兵隊のかっこうをした「しんし」と対照的。

とちゅうで十円だけ山鳥を買って  
やっぱり見栄を張る虚栄心の強さはそのまま。

紙くずのようになった二人の顔  
もう元のとおりになおりませんでした。  
その人物の人間性を丸ごと表す「顔」を一生くしゃくしゃのままにして帰す。この軽薄な「しんし」に象徴される浅薄な都市文明に対する賢治の怒りが込められている。

この作について賢治は、

「ふたりの青年しんしが猟に出て路に迷い『注文の多い料理店』に入り、そのとほうもない経営者からかえって注文されていたはなし。糧にとほしい村のこともらすが、都会文明と放恣な階級とに対するやむにやまれない反感です。」と説明しています。

「都会のブルジョワへの怒り」

#### 注文の多い料理店

童話集の書名に事とした賢治の自信作で、もちろん代表作の一つといえる作品です。この作品も、よく教科書に取り上げられています。

二人の青年しんしが猟にきて道に迷ってしまい「注文の多い料理店」に入っていきます。そして、そのとほうもない経営者からかえってつきつきに注文をされて、痛烈なしかえしを受ける

お話です。賢治は「糧のとぼしい村の子どもらが都会文明と放恣（わがままほうだい）な階級とに対するやむにやまれぬ反感です」とこの作品の説明をしています。大正デモクラシー時代の自由、軽薄な西洋かぶれの無節操、虚飾にみちた都会の風潮と、いつぼう、まじしい岩手県の素朴な人たちをおそった凶作、困窮した生活の中で、木の実、草の実を食べ、食いつめて、ときにはわが子、娘さえ売りに出さればならない悲惨とを考えあわせて、都会に対する憧れと共に、どうしようもない反感が、こうした一種ぶきみな恐ろしさをひめた作品を描きたのだといえましょう。都会人に対する嫌悪感を皮肉に表現し、奇抜などんでん返しにあう低俗な人間の滑稽さ、作者がこの作品でいたい点はそこにあるといえましょう。

「ぜんたい、ここの山はげしからんね。鳥もけものもIびきもいやがらん。なんでもかまわないから、早くタソタアソと、やってみたいもんだなあ。」

「しかの黄いろな横っ腹なんぞに、二三発お見舞いもうしたら、ずいぶん痛快だろうねえ。くるくるまわって、それからどだつと倒れるだろうね。」

すっかり兵隊風のよそおいをし、びかぴかの鉄砲と白熊のように太った二ひきの大をつれた東京のブルジョワ階級の人間の軽薄さをこうした会話を冒頭にもってきて、皮肉に描いています。山の妖気をしめすために、白熊のような犬が「めまいを起こして、しばらくうなつて、それからあわを吐いて死んで」しまうのです。「じつにぼくは、一千四百円の損害だ」と犬の死に対して、物に換算する人間の浅はかさを描いています。

このしんしはここで一軒の西洋料理店をみつげるのです。いろいろの注文を読みながら、自分につごうのよいように解釈していく二人です。

「このうちは……ただでござうするんだぜ。」

という浅はかな金持のケチ根性。「こんなところで、あんがいぼくらば貴族とちかづきになれるかも知れないよ」という成金ものの俗物性……賢治の都会人に対する精一杯の皮肉は山猫のわなにはまっつていく過程で次々と暴露されます。やがて「塩をからだにもみこめ」という注文を読んだところで、二人はことの重大さにふるえだしてしまいます。かぎ穴からこつちを見ている青い目の気味悪さ……。

「顔がまるでくしやくしやくの紙くず」のようになってしまふ二人です。作者は二人をみごとに打ちのめし、徹底的にみじめな状態につきおとして、最後に、一度死んだはずの大を再登場させます。山猫に人間が料理されるという怪奇な着想、救いとしての犬の設定、それも一度冷酷に捨てられながら、ふたたび主人を助けるといふ皮肉な運命を与えているのです。

二人のしんしの紙くずのようになった顔がもとにかえることはなかった、ということばから、作者が、この物語を通して、いいたい万感の思いを読者は知らされるのです。

賢治独特の描写や表現は、この作品でも同じように随所にみられ、それが物語の展開に豊かな幻想の世界を描き出してくれます。そこに私たちは賢治童話の面白さにひかれ、そのとりこになる秘密の一つがかくされていることを知るのであります。

ポプラ社文庫解説より